当別町 140 年特別企画
第 10 話 阿蘇岩山の今昔物語

国の安全保障に関わる高度な施設のため、阿蘇岩山に気軽に入山することはできません。

ミグ 25 を捉えた阿蘇岩レーダー
海抜 418 m の阿蘇岩山は眺望も良く、道都札幌の防空拠点として好条件が揃っていました。
（写真：当別 30 年史　航空自衛隊当別分屯基地）

24 時間体制で北の空を見張る　航空自衛隊当別分屯基地
その隊員たちと町民の交流も 55 年を数えた

①空からの脅威

昭和 51 年 9 月 6 日午後、ロシアの方角より未確認の飛行物体が日本の領空に迫っていました。航空自衛隊の阿蘇岩山にある当別分屯基地のレーダー監視にも緊張が走り、ただちに千歳基地から F4 ファントムがスクランブル発進されました。その後、飛行物体は民間の函館空港に強行着陸し、それが旧ソビエト空軍が誇る当時最新鋭のミグ 25 戦闘機であることが判明したのです。その後、パイロットはアメリカへの亡命を希望、我が国初めての事件に世界中が緊張しました。「ミグ 25 事件」と呼ばれるこの出来事は、あらためて、冷戦という国際間の複雑な関係と、空からの脅威を印象付けることになりました。

函館空港に強行着陸したミグ 25
（写真：航空自衛隊）

②阿蘇岩山への米軍進駐

第 2 次世界大戦後も朝鮮動乱など、東西冷戦が強まる中、アメリカ第 5 空軍は日本におけるレーダー網の整備を必要とし、昭和 27 年から道内にも稚内、襟裳、根室、網走、奥尻と当別の 6 箇所に施設を設置しました。

レーダー施設は、地平線の見通しの関係から高所が望まれ、しかも交通も不便な山の頂や海岸部に設置されることが多く、他のレーダーサイトとの位置関係からも当別の阿蘇岩山と中小屋が候補に上がりました。後に交通、輸送の便から阿蘇岩山に決定したと近藤辰雄元町長が証言しています。しかし、当時の主な交通は町営の殖民軌道で、冬はあまりの積雪のために工事も一時中断しました。そのような困難の末、昭和 29 年 9 月に完成した当別の基地には兵員 200 名と、軍要員 30 名が配置されました。建設に伴い、多くの工事関係者のために弁華別地区にも床屋、雑貨店、飲食店が軒を並べ、「セブンスター」という隊員用の飲み屋もできるなど、一時期はとても活気づきました。

レーダーの監視は 3 交代 24 時間体制、毎日が緊張の連続

航空自衛隊当別分屯基地
第 34 代司令　西本　彰雄さん

当別分屯基地は、町民の皆様との様々な交流の中で、ご理解、ご協力を得ながら今年で開庁 55 年を迎えました。

鮮やかな四季の移り変わりを目の当たりにできる自然の豊かさと、町民の皆様の温かさを感じられるこの町で、隊員は一丸となってこれからも空の守りに励んでいきたいと思います。

今後ともよろしくお願いいたします。

昭和34年11月24日、日米安保条約の規定に基づき移管を受けた。
レーダー施設並びに兵舎2棟の供用を受けた。（写真：当別30年史）

第45警戒群の組織

- 群司令
- 群本部　隊務の総括事務
  - **監視管制隊**：レーダーによる航空警戒、弾道ミサイルなどの警戒監視
  - **通信電子隊**：通信の実施、電子資機材、施設の保守、自動管制組織のシステム統制
  - **基地業務隊**：分屯基地における後方支援

③航空自衛隊第45警戒群

昭和34年11月、基地はアメリカ軍から航空自衛隊に移管され、青森県三沢基地を司令部とする北部航空警戒管制団（北日本の9箇所のレーダーサイトから成る）の中枢「第45警戒群」として重要な任務を担っています。特に資本主義と社会主義がしのぎを削っていた冷戦時代以降、ソビエト連邦（現在のロシア）や国交のない北朝鮮とは日本海を挟んで対峙する位置にあり、不法に領空に接近する航空機に対して、できるだけ遠距離で発見・識別し、必要な措置をとることが、その主たる任務です。

ミグ25事件をきっかけに、早期警戒のシステムが確立されましたが、弾道ミサイルなど様々な脅威に対して、今日も平和を守る監視活動が日夜続いています。

④隊員と地域の交流

基地の隊員とその家族は、多い時期で600名を数え、ほとんどが町内に生活しています。開設当時から弁華別地区をはじめ地域との交流があり、映写会の開催や、農繁期の援農出動、地元神社や基地内での交流相撲大会もありました。昭和36年7月の集中豪雨や翌年4月の融雪洪水には、町の要請を受けて災害派遣を行い、炊き出しや道路の復旧工事などに活躍しました。

昭和37年6月には地域との連絡、親睦を図り、防衛思想の普及や自衛隊の理解を深める「当別町自衛隊協力会」が設立され、現在も700名が会員となっています。

最近では防災意識の高まりとともに、町内会や学校単位の防災訓練の指導と協力、地域のお年寄りや体の不自由な方の世帯への除雪ボランティア、そして地域行事への積極的協力を行っています。また、隊員個人レベルでは、体育指導員やスポーツ団体の役員、指導員として町民への実技指導など、その貢献は計り知れないほどあるのです。

このように地域とともに歩んできた自衛隊は今年55周年を迎えました。当別小、弁華別小学校の校歌にも登場する町のシンボル的な阿蘇岩山。その基地と隊員は、当別町の枠を超えて日本の安全に大きな役目を成しているのです。

毎年恒例の除雪ボランティア

インタビュー

日光正博さん　（西町在住）

私が在任中、雪像責任者を務めた「あそ雪の広場」での雪像コンクールは僅差で優勝を逃し、残念な思い出がありますが、町の方と雪像の腕を競ったことや、スキー連盟の役員を永年務めたり、テニス協会の発足に携われたことで町内の方々と面識ができました。

その繋がりが時には任務や隊の行事にも役立ちました。町民スキー大会で協賛品のお願いに歩くと、多くの商店は気前良く提供していただき、公私共にお世話になりました。そのような雰囲気も、当別が人気ある赴任地の理由ですね。

弁華別中学校での防災訓練

第1回より参加協力の「あそ雪の広場」

■参考文献
当別町史（1972年）
あそいわ 弁華別開基百年記念誌（1983）
当別30年史【航空自衛隊当別分屯基地】（1985年）
■情報課広報広聴係
☎23－3069